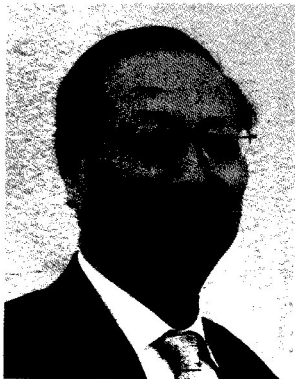


【ながさわひろゆきさん】

1951年兵庫県生まれ。大阪府立大学名誉教授、若狭ネット資料室長。阪大機械工学科在学時の原発研究で危険性を確信、大学院で専門を変えて反原発に。以後、40年以上、闘う反原発科学者として活動、1991年に若狭ネット結成、2013年に同資料室立上げ。



規制委交渉の意義が見えた。

長沢啓行

前原子力規制委員長代理の島崎邦彦氏が入倉式批判を始めたのは、昨年5月の日本地球惑星科学連合大会だった。2014年9月の任期切れ再任なし退職からわずか8ヵ月、原発推進派への抵抗のようにも見えたが、私たちには「何を今更」という反発のほうが強かった。というのも、彼は川内原発の基準地震動評価の責任者だったし、2014年

3月と7月の交渉で島崎氏を意欲して規制委を揺さぶるも、無視され続けたからだ。「なぜ在任中に規制委の中でやらなかったのか」と怒りすら覚えた。しかし、彼の入倉式批判はその後10月の日本地震学会、11月の日本活断層学会、今年5月の連合大会と4回続き、遂に大飯原発の地震動評価やり直しにこぎつけた。

共同通信の取材を受けたとき、島崎氏の今回の行動は「2年前に発端」があり、それが先の交渉だったと伝え聞かされ、信じられなかった。6月19日付け福井新聞と中国新聞に掲載された記事に曰く、「島崎氏は、長沢氏の指摘を『ポイントを突いた議論だった』と話す。2年前の交渉で「答えに窮した審査官は、島崎委員長代理らに相談して検討すると約束。その場を切り抜けた」。審査官から相談を受けた」島崎氏は「規制庁に検討を指示したものの、報告はなかった」。つまり私たちの声は島崎氏に届いていたにもかかわらず、原子力規制庁のサポーターユで踏みじられたのだ。

私たちの入倉式批判は2008年の島根、志賀原発の耐震バックチェック批判に始まる。*当時の原子力安全・保安院や原子力安全委員会と何度も交渉し、入倉式批判を重ねた。「難しい」議論のため、まさに孤軍奮闘だったが、「これを大衆運動の武器にしなければ勝

てない」と必死だった。

今回の島崎氏による問題提起で、ようやく入倉式批判がマスコミで広く取り上げられ、地震動の過小評価が明らかになった。あわてふためく規制委と規制庁の居直りを許さず、徹底した批判を続けなければと改めて思う。

*08年9月号「反原発講座」

